

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2018年1月 NO.201



【もくじ】

- 2~3 今日このページを開いてくれた方へ。…西川綾
- 4~5 ドジョウの話…町田吉彦
- 6~7 美術と「死者」たち…黒瀬陽平
- 8~9 絵金スタンプ、できてこれから…吉川琴子・福原明理
- 10 「アンテナ」広島からやってきたK君との出会い…下尾仁
- 11 薬膳を身近に、おうち薬膳…野中なか
- 12~13 高知市文化振興事業団12月の事業から
- 14~15 風俗歳時記・風伯

今日、このページを 開いてくれた方へ。

西川 綾

私はごくごく普通の生活を送っている人間です。今まで自分の事について：など学生時代の作文ぐらしいか書いたことがないので、至らない部分もあると思いますが、良ければ最後までお付き合いください。

【はじめに】

私はイベントの企画と音楽活動で自分のやりたい事を発信しています。あくまで個人でやっている事なので大きな事ではありませんが、今の私の生活においてはなくてはならないものです。大きく区分すると音楽活動もイ

ベント企画も一つの事になるのかもしれない。最近、高知でも色々な所で生演奏しているのを見かけます。カフェやBar、野外でのマルシェやイベントに出演したり、自分で企画してイベントを立ち上げたりしています。

【人生が変わった出会い】

私は今、三十二歳になる年なのですが二十代後半までは特別に音楽好きというわけではなく、流行っている音楽をたまに聴くぐらいの人間でした。楽器をやっていたわけでもなくライブハウスに入りびたっているわけでもない。今

る側だったので、やる事、考えなくちゃいけない事、全てが未知の世界でした。
大好きなミュージシャンを呼んでイベントが出来るのは嬉しい事でしたが、主催のやる事の多さ、お客さんを集めることの大変さ、楽しい事よりも頭を悩ませる事が多かったと思います。

正直、何回も主催イベントをやってきて「もう無理！これで次はやらない」と思うぐらい大変だった事もあります。それでも自分がやりたい事につき通すことができたのは「次はいつやるの？」とか「来て良かった」と声をかけてくれる人がいたからなんだと思います。

元々は、好きなミュージシャンが気持ちよく自分の音楽を出来る空間をつくりたいという気持ちでやり始めて、そこに自分の様に今まで音楽に興味がなかった人にも来てもらえる時間をつくりたいという想いが加わりました。

その気持ちは今でも変わらず、初めてイベントに来る人、子供が産まれてなかなかライブに来れなくなったり、昔からずっとライブに来てくれる人、みんなが満足し

てくれる様なイベントづくりを指しています。お客さん、出演者、スタッフ、みんなが満足して欲しいと欲張りな気持ちでやっています。音楽活動についても同じで、技術がいるのももちろんだと思いますが「みんなが楽しめる空間をつくりたい」と思いながら活動しています。

【おいしい×音楽時間】

二年前から始めて定期的に行っているカフェ空間と音楽のコラボイベント、おいしい×音楽時間。



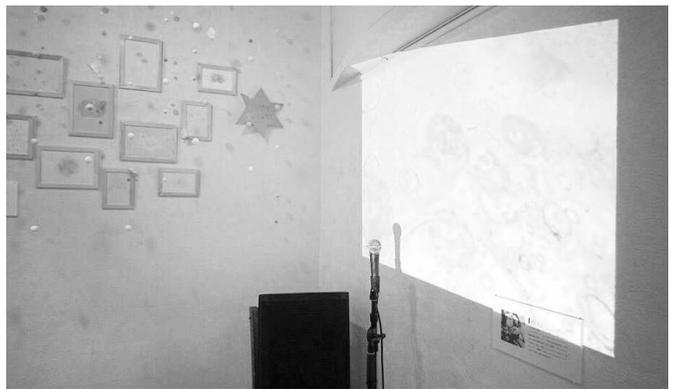
私が一番好きなミュージシャンの方をメインアクトとして、毎回場所や共演のミュージシャンを変えてイベントを作っています。

このイベントには私の好きなもの、やりたい事、ライブに来たことのない人も楽しんで欲しいという想いを詰め込んでいます。なので、この先ももっと進化して永く続けていきたいイベントです。

【これからやりたい事】

今まで色々な場所で企画をさせてもらったりライブをさせてもらいました。美容師さん、絵描きさん、料理人の方、違う分野で頑張っている人の話を聞くといつも刺激をもらいます。この人とこんな事したらきっと楽しい！面白い！ってアイディアが降ってきます。だから来年も○○×音楽といった他の分野で頑張っている人とコラボした全く新しい企画を生みだしたいと企んでいます。

きつとすぐく大変でまた悩む事もたくさんあるだろうと今から想像できますが、企画を考える時間とイベントをやり切った達成感とは他では味わえない、たまらない瞬間なのです。



【最後に】

初めてイベントをやりとげた日の、他の人から自分のやっている事が求められた瞬間は、これからもずっと忘れることはないと思います。

でも私は特別に何か出来るわけではなく、何か資格を持っているわけでもありません。やりたいと思っただけに一歩ずつ踏み出しているだけなのです。

でも求めてくれる人や場所、自

分がやりたいと思える事がある内は、ずっと前に進み続けていくと思います。

もし、この先どこかで私のやっている事を目にする時があれば、少しでも立ち止まって見ていただけると嬉しいです。

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

にしがわ あや

一九八五年生まれ、高知市出身
県内でイベントの企画や音楽活動を展開中。

ドジョウの話



町田 吉彦

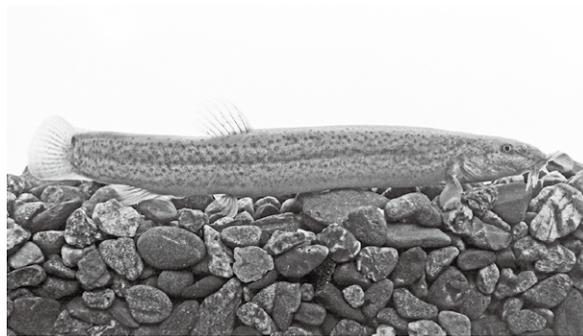
現在、高知県レッドデータブック（略称RDB）の改訂作業が進行中である。県RDBが世間で認知されているかどうかはよく分からないが、掲載される種の選定作業は真剣勝負である。

県がRDB動物編を出版したのは二〇〇二年。何事も一周おくれ二周おくれの高知県だが、これに関しては全国でも早かった。その中で、ドジョウが絶滅危惧種として紹介されたことを把握している県民の割合は、おそらくゼロパーセントに限りなく近いだろう。改訂にあたり、ドジョウの再調査を引き受けたが、県土は広い。しまった！と思ったが、引き返す訳にいかない。絶滅危惧種のランクを分かり易いように表現すると、絶滅の危険性が高い、かなり高い、きわめて高いとしてよいだろう。

高知県のドジョウは二〇〇二年の段階で「高い」だったが、さらに上のレベルと評価された。

ドジョウは中国語で泥鰌。水田とは切っても切れない関係にある。北部九州から始まった日本の水稲栽培が本州の北端に達したのは弥生時代の前期とされているようだから、日本の水田を代表する魚として差し支えない。ただし、北海道のドジョウは移植されたとするのが定説であり、その根拠としてアイヌ語にドジョウを指す名詞がないとの見解は説得力がある。一方、沖縄県ではどうかと言うと、外来種説と在来種説の双方があった。これを解明したのは二〇一七年三月の論文である。沖縄本島の北部に在来のドジョウが棲息していることが遺伝子分析で証明され、双方の棲息が明らかとなった。こ

の論文の作成で高校生が活躍したのも忘れてはならない。同県では未知と思われるドジョウも発見されている。沖縄県は動植物の宝庫で、自然科学のレベルの高さには敬服するしかない。



2017年10月11日に高南台地（四万十町）の三面張り水路で採集されたドジョウ。旧窪川町でも産地は少ない。撮影用小型水槽を使用。

さて、高知県では食材としての純淡水魚（一生を淡水で終える魚）はさっぱり人気がない。大人数でコイを漁ったという四万十川筋の話があるし、昔は仁淀川にも著名な川漁師がいたが、もうそのような人はほとんどいない。ドジョウとなると、釣り餌として利用する特定の人以外、まず関心がないだろう。九州大学総合研究博物館の資料によると、四国では瀬戸内側にドジョウの食文化があるが、太平洋側にはそれを示す丸が一つもない。食材としての需要がゼロである。うなぎ一匹どじょう一匹とされるほど栄養満点で、江戸の庶民が「どぜう」としてこよなく愛した食材なのだが、食文化は恐ろしい。県民の無関心は悲しすぎる。

高知県でドジョウが減った理由の一番は、圃場整備が完璧と言つてよいほどなされた事であろう。水路は例外無くコンクリートの三面張り。ただし、その中でも泥が少しでも溜まっているとドジョウがまれに見つかる。残念ながら、流れは一方方向でしかも速く、彼らが生まれた繁殖地に戻ることは

ない。子孫を残すことができない存在なのだ。ドジョウがいるから豊かな自然が残っている三面張りだと錯覚してはいけない。同じことはミナミメダカにも当てはまる。こんな場所にもいるのにどうして絶滅危惧種だ、という意見もある。しかし、三面張りのドジョウもミナミメダカも、狭い繁殖地に異変があれば水路から一気に姿を消す存在でしかなく、世代の維持とは無縁なのだ。

もうひとつの大きな理由は、稲作の様式の変化である。かつて高知市朝倉地区の湿田は有名で、私が高知大学の学生の時にお世話になったアパートの家主さんから、朝倉には嫁にやるなどという話があったと聞いた。泥の深さは半端ではなく、重労働を通り越しているらしい。県下を走り回り、これが湿田かという場所を二カ所ほどかろうじて見たが、もうほとんどない。現在は冬に乾田を十分に乾燥させる。これが水田に依存して生活してきた動物には致命的である。泥の中で越冬できずに、世代が断ち切られる。部外者から見ればドジョウを残してほしいが、生

産効率の問題もある。無理は言えない。私が調べた限りでは、水田の中でドジョウを見たのは高知市で一カ所、地域全体で昔ながらの畦道を守り、水路にドジョウが安定して棲息しているのは四万十市の一地区のみだ。昔ながらの水田の景観・環境を残したいという意思に支えられている。四万十市の方は、このドジョウは絶滅危惧種ではないよ、と語ってくれた。自然の豊かな水田を子供達に残すのが使命だとも。容易にできることではない。

二十世紀の終わりに、宮城県のある田舎から「ふゆみずたんぼ」という言葉が流れ始め、広がりつつある。冬にも水をたたえた水田のことである。私が子供の頃は、どうかすると三月の終わりまで一面雪に覆われた水田が見慣れた光景であった。要するに、昔やっていた冬期湛水（とうきたんすい）に冬に水を張る）のだが、さまざま動物にやさしい稲作として今注目されている。アメリカでも指摘されているが、水田の生き物が復活しつつあるのは確かだ。ただし、どこの水田の動物相もこの方

法ですぐに復活するのではない。冬に雨が多く、また、有機栽培水田でない効果はすぐに発揮されないとされる。高知県にとって前者のハードルは特に高い。

農林水産省は二〇〇一年から、環境省と連携して田んぼの生き物調査を展開している。主力は子供達。しかし、その動物のチェック項目を見ると、高知県はとても参加できない。高知県の水田の動物相は貧弱そのもの。全国レベルとの比較は恥ずかしい。土佐清水市の低地でおんちゃんに、ドジョウはおらん？と尋ねたところ、おるがぁはイノシシばあのもんよ、と即答された。高知県の水田の代表はドジョウではない。今はイノシシだ。

私は中学生の時に、農業による自然破壊を体験した。家の前の溝のドジョウもモクスズガニも、目の前の水田にいくらでもいたホタルも姿を消した。大学院に入学生たころ、一九六二年に出版されたレイチェル・カーソンの『*Silent Spring*』（後の訳本の書名は『沈黙の春』）を開いた。高知県のドジョウも彼女が指摘した農薬の危険性

に曝されたはずである。南国市の一部には外来のドジョウが定着している。人知れず滅ぶ可能性が高い高知県のドジョウは、県民にとってどんな存在なのだろう。いまだ自分の解答が無い。

まちだ よしひこ

一九四七年 秋田県生まれ。高知大学名誉教授理学博士。
高知県希少野生動植物保護専門委員、環境省希少野生動植物保護推進員、高知市民の大学運営委員会委員など。
専門は水生動物学、地域の自然史科学。

美術と「死者」たち

黒瀬 陽平

ともあれ、要は展覧会を作るのがキュレーターの仕事なわけだが、そのなかでも重要な仕事のひとつが「リサーチ」である。もちろん、アーティストだって、自分の作品を作るために本を読んだり、取材に行ったりする。だから、リサーチはべつにキュレーターだけの仕事ではない。しかし、複数のアーティストが参加する展覧会全体のテーマや内容、コンセプトを決めるためのリサーチをするのは、キュレーターの仕事である。

多くのアーティストは、自分の作品のことは考えるけれど、自分が参加する展覧会全体のことはいままであまり考えない。たまに、自分の作品を作るだけじゃなく、展覧会も作ってしまうアーティストがいて、そういうアーティストのことを「アーティスト・キュレーター」なんて呼んだりする。でも、そういうことができるアーティストは、あまり多くない。

だから、ぼくはキュレーターとして、展覧会を作るために、いつもたくさんのリサーチをすること

ぼくが代表をつとめる「カオス・ラウンジ」は、若い現代アーティストたちのグループだ。カオス・ラウンジは二〇〇九年、当時十九歳だったアーティストの藤城嘘が、インターネット上で五十人のアーティストたちを集め、展覧会を開いたことで生まれた。東京の小さなギャラリーに、お互い、作品とハンドルネームしか知らないアーティストたちの作品が並んだ。同じ頃、大学院で絵を書きながら、美術批評を書きはじめていたぼくは藤城嘘の活動を知

り、コンタクトを取った。そして二〇一〇年、キュレーターとしてカオス・ラウンジに加わった。キュレーターという仕事について、あまり馴染みのない人も多いだろう。美術におけるキュレーターの仕事（美術における、と断わりを入れるのは、キュレーターという仕事自体は美術以外のジャンルにもあるからだ）簡単に言えば、展覧会の企画を立て、それを実現することだ。さらに、キュレーターには実に様々なタイプがあり、美術館やギャラリー専属の

キュレーターもいれば、フリーのキュレーターもいる。

カオス・ラウンジは、はじめこそただの若手のアーティストグループだったが、二〇一五年に法人化し、小さいながら自分たちのギャラリーを持ち、アーティストのための私塾もやっている。国内にカオス・ラウンジのような活動をしている現代美術の団体はほとんど無く、その代表であり、キュレーターであるぼくの仕事は、少し特殊なものだと言えるのかもしれない。

が仕事となっている。特に震災以後、東京以外の場所で発表する機会が増え、それとともに、いろいろな場所でもリサーチをするようになった。

ぼくはキュレーターになってから、高知で展覧会をキュレーションしたことはない。しかし、リサーチをしたことはある。二〇一六年、香川で開催された「瀬戸内国際芸術祭」にカオス・ラウンジで参加した時のことだ。瀬戸内海の島々を舞台にしたこの芸術祭に参加するにあたって、カオス・ラウンジの会場となった女木島を中心に、瀬戸内海の歴史を集中的に調べることになった。

瀬戸内のリサーチをはじめてからずっと、ぼくのなかで気になっている出来事があった。「国鉄戦後五大事故」のひとつとして知られる「紫雲丸事故」についてである。一九五五年五月十一日の午前六時五十六分、濃霧につつまれた瀬戸内海上で、宇高連絡船「紫雲丸」が貨物船と衝突し、沈没した。

百六十八名もの犠牲者を出したこの事故は世間に衝撃を与え、当時まだ構想段階だった「本州四国連絡橋計画」、つまり瀬戸大橋建設を推進するきっかけにもなった。

不幸なことに、沈没した紫雲丸には、修学旅行中だった小中学生が乗っていた。事故によって犠牲になった修学旅行関係者は百八名、うち百名は修学旅行を楽しむ児童たちだった。そのなかに、高知市立南海中学校の三年生百十七名が乗船していた。百十七名のうち、二十八名が帰らぬ人となった。

中学校教諭だった母は昔、南海中学校に勤務していた。母が勤務していたのはぼくが小学生の時、紫雲丸事故については、母との思い出とともに、おぼろげながら記憶の片隅にあった。ぼくは母を介して、南海中学校の校長先生にアポイントを取り、東京から数名のアーティストを連れて、南海中学校を訪ねることにした。

ぼくたちは、教室のひとつを改装した「紫雲丸遭難事故資料室」

という部屋に案内された。そこでは、紫雲丸事故についてのパネル展示や、遺族の方々からのメッセージ、生徒たちでつくったジオラマなどが展示されていた。ぼくは、ある小さな記事の前で立ち止まった。「行くはずだった修学旅行」と題されたその記事は、事故から四十九年後の二〇〇四年五月十一日に、事故から助かった南海中の同期生三十九名が、事故で中座してしまった修学旅行を、およそ半世紀ぶりに「やり直す」ために出発したことを伝えていた。しかも、同期生たちは亡くなったクラスメイトたちの遺影を持参し、バスに乗って京都へ向かったのだ。記事には、四十九年前の見学予定地だった三十三間堂を見学する同期生たちの写真があった。もちろん両手には、クラスメイトの遺影が抱えられている。そこには、中学生のままのクラスメイトとともに京都見学をする、初老の「修学旅行生」たちの姿があった。

ぼくは、その記事を読み終えた

時、紫雲丸事故を作品のテーマにすることをやめよう、と思った。なぜなら、同期生たちが行った半世紀ぶりの「修学旅行」にはすでに、美術が歴史や死者と向き合う時に必要なすべてが詰まっていると感じたからだ。だとすれば、ぼくがキュレーターとして、これ以上付け加えることは何もない。ここには、「形式ばった儀式の堅苦しさや、「歴史上の事件」として客観的に記述する冷やかかさとはまったく違う、死者との対話がある。おそらく、美術もまた、この「修学旅行」のようなものであるべきなのだ。

くろせ ようへい

一九八三年高知県生まれ。
美術家、美術批評家。ゲンロン
カオス・ラウンジ新芸術校主任
講師。

絵金スタンプ、 できてこれから

吉川 琴子
福原 明理

十月中旬のある日、私たちはいつものようにLINEスタンプのダウンロード数をチェックしました。その総数を表すグラフを見ると、明らかに昨日までと違う。昨日から今日への直線は右肩上がりを通り越し、直角に近い角度で上へと跳ね上がっています。私たちはその直線に釘付けになってしまいました。

きっかけは今年の春のこと。LINE（無料でメールや通話が楽しめるソーシャル・ネットワークキング・サービス）を利用していたとき、「絵金の絵がLINEスタンプにあつたら、面白いかも」そんなことを、ふと思ったのです。そもそも絵金とは誰なのか。幕

末の土佐で人気を博した町絵師で、狩野派の絵師として土佐藩家老の御用絵師の任に就いていたことも。その後紆余曲折の人生を歩みながらも、赤岡の町の人から愛され、数多くの作品を今に残しています。

その絵金が描いた芝居絵屏風の代表作を収蔵している施設「絵金蔵」が出来て十二年、その来館者層の年齢は少し高めだと感じています。もちろんその傾向にある美術館は多いのですが、絵金や絵金文化を後世に末永く残していくという観点から見れば、少し物足りない。若年層にも絵金について興味を持ってもらいたい、何か良い方法はないだろうか、日々考えながら仕事をしていました。LINE

Eは現在、若い世代を中心に利用され、そこで用いられているスタンプ（大きな絵文字のようなもの）には、人気のキャラクターから一般の方が制作したもので数多くのもが並んでいます。そこに絵金のLINEスタンプが並んでいるところを想像してみました。ポップでキャッチーな絵が並ぶ中、異彩を放つ浮世絵の絵柄、極彩色と謳われる鮮やかな色彩、迫力のある形相。これは若い人に話題になる！そう確信し、LINEスタンプ制作へと動き出したのです。

制作するにあたり、まず関係者に許可を得ることが第一関門でした。作品データの活用には絵の所蔵者（赤岡の町の人）の了解が当然必須。また絵金藏運営委員会の理事の承認も必要です。LINEを利用していない方も多し中、職員同士のLINEでのやり取りや、ここに絵金の絵が入るとどんなに楽しい画面になるかなど、必死の提案により、ついには「自分たちには思いもよらないことを考え付く、やってみようか」そう言ってくれました。そこからは早かった

ように記憶しています。説得と同時に進行で制作していた四十個のスタンプ案を完成させ、八月中旬に販売申請、九月上旬にはLINE社による審査を通過しました。この審査が二つ目の関門で、絵の描写として適さないものなどの選別が行われます。絵金独特のおどろおどろしい世界観を崩さないように細心の注意を払いながら制作していきました。こうして、とうとう異色のLINEスタンプが完成したのです。



LINE スタンプ例①

材料はできた、後は販売するだけという状況にはなりましたが、私たちはちゃんとわかっていました。このまま開始ボタンを押して販売をスタートさせても誰にも気が付かれず、ほとんど売れないだろうということを。数あるスタンプの中で注目を集めるため、私

私たちは可能な限りメディアに協力を仰ぐことにしました。プレスリリースを送って取材を受け、情報掲載サイトでの告知、ポスターの揭示、同時期に開設していた公式ツイッターでも日々PRしました。絵金蔵が高知で開催中の幕末維新博の地域会場であることも幸い、県や市の方々からも多くの協力を得ることに成功しました。このような地道な広報活動を経て、今年の十月一日午前零時、満を持して、絵金蔵オリジナルLINEスタンプの発売となったのです。

このLINEスタンプ全四十種は、絵金蔵に収蔵されている二十三枚の芝居絵屏風から切り抜いたものを使用して、それぞれの作品から一〜二人が登場しています。個性あふれる二十三点から均等にピックアップすることで、赤岡に残る全作品の登場人物を一堂にご覧いただけるようにしました。

ね。「あつ、あの人はこんなことをしていたのか」なんて考えながらまわるとより一層楽しめると思いませんか？また、彼らが話している言葉は、その人物がいかにも言っているようなことや、思わずクスツと笑える言葉をセレクト、使いやすい言葉も入れてみました。「使いづらいけどどうしても入れたい！」なんて、私たちの強い支持を得ている言葉も数点含まれています。せつかく作るのですから、ほんの少しの遊び心も入れてみました。まだご覧になられていない方は、ぜひ公式ストアで調べてみて下さい。



LINE スタンプ例②

そうした日々の広報のおかげか、発売から少しずつダウンロード数を伸ばしていた絵金蔵オリジナルLINEスタンプ。冒頭の十月のあの日、ダウンロード数が直角に

伸びた日の高知新聞の朝刊には、LINEに絵金蔵スタンプの見出しが踊りました。地元の新聞やラジオ、テレビなどで話題にしてください、県内のユーザーをはじめ多くの絵金ファンに楽しんでいただいているようです。狙い通り、若年層の利用者もすっかり獲得しています。もちろん絵金蔵関係者の間でも頻繁に使われており、個性あふれる登場人物たちが会話に花を添えています。この記事を読んで下さった方の元でも、彼らが賑やかに話し始めることを願っております。今回私たちは、若い世代に絵金を知ってもらおうということを目指し、LINEという新しい媒体の力を借りました。まだまだこれからですが、少しの前進にはなったのではないのでしょうか。これからの絵金蔵の歩みにも注目して下さいね。

最後にもうひとつご紹介。このLINEスタンプのすぐ後、十月十七日からは、絵金蔵オリジナルフレイム切手を発売しております。こちらはお隣の弁天座と同時発売・数量限定です。高知県内の

絵金蔵（えきんぐら）
香南市赤岡町五三八
TEL 〇八八七―五七―七二一七
開館時間 九時～十七時
最終入館十六時半



郵便局、絵金蔵などで好評販売中、お近くの郵便局でぜひお手にとってください。

この土地で大切に受け継がれてきた絵金文化と合わせ、絵金が幕末を生き、多くの絵を残した赤岡町の魅力を、これからも広く末永く発信していきたい。赤岡町とともに歩んできた、絵金蔵らしいスタイルで。

「アンテナ」 広島からやってきた

K君との出会い



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたてて沢山の人と繋がろう。すると、面白いことがやってくる。

今から二年程前、店の開店と同じ時に、彼は覇気のない顔と疲れきった雰囲気で行ってきた。

彼の名前はK君。いろいろと話を聞いてみると、彼は広島から車で来て、昨夜は車で眠り何故か山の方に迷い込み、やっと山里のこの店にたどり着いたとのこと。僕は彼にお風呂に入る？と言ってみると、彼は「えっ、お風呂？」と驚いていた。実は、僕の店の屋上には手作りの五右衛門風呂がある。彼は入っていいなら入りたいですと言ったので、さっそく薪で風呂を温め、彼に入ってもらった。

幾分疲れのとれた彼は、食事を済ますと、高知で名所ではなく面白いところかありますか？と尋ねてきた。僕は直感で、安田町にある昭和レトロな映画館（大心劇場）に行ってみればと提案してみた。僕は勝手に、今、彼が求めているのは場所ではなく人ではないかと感じたのである。そして、

大心劇場の小松さんなら彼を受け入れ、ひよっとしたら泊めてくれるかもと思ったからである。一応僕から聞いたと言ってみて、と彼を送り出した。

それから一週間後、一枚のハガキが届いた。K君からである。ハガキにはお礼の言葉が綴られ、そして大心劇場の小松さんに泊めてもらいましたと書いてあった。僕は小松さんありがとうと思うのと

同時に心があたたかくなったのを覚えている。

（小松さん、ありがとう）

それから半年程経ち、彼がまた店にやって来た。彼は高知に移住したいと思い、今かつおゲストハウスで住み込みのヘルパーをやっていますと言っていた。それからちよくちよく遊びに来てくれるようになったある日、そろそろヘルパーが終わるので、どこかいっアパートないでしょうか？と。またもピンときた僕は、僕の店から歩いて一分程の所にある家賃一万円のアパートをすぐに紹介し、彼は今現在もそこで生活をしている。

彼とはますます仲良くなり、いろんな話をするようになった。何故あの時高知に来たのか？

実は彼はウツという病気で死に場所を探していたと…。でも高知にしばらく滞在し、あの日の表情とは全然違っている。彼は、すごいスピードで色々な人と繋がりが交友関係を広げていった。彼は音楽もやっていて（なんと若いころにはデビュー寸前までいっていた）、歌も本当に上手で僕のやっているバンドにも入ってもらい、今は一緒にバンドもやっている。だが…元気だった彼をまたもウツが襲ってきた。ちよくちよく店に来てくれるので心配はさほどでもないが、なんだかしんどそうなので見るのは辛い。早く良くなってもらいたい、こればかりはどうしようもない。

僕もいつウツになるかわからないので、その時は先輩、よろしくお願ひしますと言ったら、彼は、アドバイスはできないが話を聞くことはできますんで、と言ってくれた。

今まさに僕は彼の話を聞くことしかできないが、元気になれば、またいろんなことを一緒にやりたいと思っている。

K君、慌てずゆっくり良くなつてね。

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

薬膳を身近に、 おうち薬膳

野中 なか

現在、高知市で薬膳教室を主宰しています。

以前、大病院で歯科衛生士として勤務していた際、栄養指導をする機会も多く、その中で朝食代わりにスナック菓子を食べている子供と出会い、胸を痛めた経験があります。「毎日の食事」と「健康」が深く結びついている事を、体験により知りました。そして親となり、自身の体の不調もきっかけで健康法を探すうちにピンツと来たのが薬膳でした。

ここに一本のバナナがあります。ただ食べてしまえば「おいしかった」で済む話です。薬膳の考え方を取り入れるとどうでしょう？「全ての食材には特性があり、食べる事で体に何らかの影響をもたらします。薬膳は食材の特性を生かし、体調に合ったものを食べる、というのが基本的な考え方です。同じバナナでも、キンキンに冷やして食べるのと、常温で食べるのでは体に与える影響が変わります」

昔、薬膳の世界には「食医」というスペシャリストがいました。

「食のお医者さん」です。食卓を担う方が家庭で食医の役割を果たすようになれば、素晴らしいと思います。喉がイガイガする時には杏仁豆腐を、疲労に負けそうな時は山芋のお粥を、という具合です。コンビニ、外食、お惣菜、と安価に食べ物が手に入る世の中だからこそ、食に対する意識をしっかりと持ちたいものです。外食の場合も薬膳の知識があれば、その時々々の体調に合わせて食材や調理法を選ぶ事ができます。例えば疲れている時は気力がアップする〓補気できる食材〓を選ぶなど、これができると「食」そして体が変わります。

さて高知県民のソウルフードとも言うべき「鰹」。

鰹の特徴を薬膳的に考えてみましょう。「体に入った時の温度変化は少なく、甘味を持つ。腎や脾のトラブルに良く、気や血を補い、胃を健やかに保つ。鰹は血合い肉が多く、血管の分布が密なので、体力の回復、不眠改善、血栓や脳梗塞などの予防にもよく、ビタミンEも多いので、老化防止や健康

維持のためにもお勧めできる」という感じですよ。ニンニク、シヨウガ、ネギ、ミヨウガ、シソ、タマネギ、ダイコンなどを組み合わせるのは、この効果を倍増させ、毒消しの役目もかねています。たまたき料理の誕生にはいわれがあります。一説では、天正年間（一五七三〜一五九二年）鰹を多く食べた土佐の住民に食中毒が多く発生し、大勢の住民が死にました。鰹は腐敗すると、有毒なヒスタミンを生成するからです。時の領主は鰹を生で食べる事を禁じましたが、住民は鰹の皮だけを炙ってごまかし、秘かに食べたのが始まりといわれています。

美味しいものを食べる機会が増える年末年始、いつもの食べ方に一工夫！お正月太りが気になるこの季節にピッタリの鰹の食べ方をご紹介します。

【鰹のたたき梅おろし和え】

- ・鰹のたたき
- ・（食べやすい大きさに切る）
- ・大根おろし
- ・刻んだ梅肉
- ・大葉・んにく
- （食べやすい大きさに切る）
- ・醤油

鰹のたたきにその他の材料を和えるだけ。

大根は消化を助け、食べ過ぎを程よく改善します。また、梅干しも消化を助け疲労回復に役立ちます。身体が冷えが気になる場合はご飯に乗せ、温かい番茶や昆布茶を注ぎお茶漬けとして食べても美味しいです（大根に含まれる酵素は加熱に弱いので温め過ぎに注意）。

もともと赤身でヘルシーなタンパク源の鰹。ダイエツトとしても有効活用できそうですね。二〇一七年の日本の世相を反映し象徴する「今年の一皿」で選ばれた「鶏むね肉料理」にも匹敵する!? 鰹のパワーではないでしょうか。



You are what you eat.
「あなたがどんな人かは食べたもので決まる」
体が喜ぶ食を！そして健康な二〇一八年のスタートを！

のなか なか

埼玉県出身、高知市在住。
Eating Laboratory 薬膳教室主宰。
栄養士。国際中医薬膳師。

12月の事業から

横坂源 チェロ・リサイタル

平成二十九年十二月八日（金）、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、チェリスト・横坂源さんのソロ・リサイタルを開催しました。

開場直前には行列ができており、早い方は三十分以上前からロビーで待機されていて期待度の高さがうかがえました。入場後も演奏を楽しみにされていたようで、緊張感のある空気の中、演奏が始まりました。

まずはじめはバッハの無伴奏チェロ組曲第二番。第一番から第六番まであるバッハの無伴奏チェロ組曲はどれも六曲からなっており、この第二番第一曲は短調の曲らしい少しもの

悲しいような、聴く人によっては暗いとも感じる曲調で張り詰めた雰囲気の間奏開始となりました。しかし、第二曲、第三曲と演奏が進むうちに、



軽快なテンポや明るい曲調が出てきて、チェロの音色に



つられるかのよう

場の雰囲気も硬さが消え、程よい緊張感へと変わっていききました。

二曲目までMCやアナウンスはありませんでしたが、三曲目の前に横坂さんから本公演での演奏曲を選んだ簡単な理由や演奏曲の解説があり、客席は更にリラックスした雰囲気になったように感じました。パンフレットによく載っている曲目解説はなく、曲目リストだけが観客の手元にある状態。クラシックコンサートでは珍しいことかもしれないませんが、横坂さんの解説を聞くことで、演奏者のこういうイメージで弾きますよ、この曲のあの部分はこういうイメージですよ、という意図が、よりわかりやすく伝わり、想像する楽しみも得られたのではないかと思います。

第二十八回

高知出版学術賞

推薦募集

優れた学術研究の振興は、文化や出版の向上のみならず、広く高知県の発展に貢献します。「高知出版学術賞」は、当該年における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図り、県勢の進展に資することを目的としています。

【対象】
① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマとした学術的著述。
② 二〇七年一月一日～十一月三十日に発行された単行本（発行日は奥付の日付による）。

【推薦】
推薦は自薦・他薦を問いません。必要事項を所定の推薦書に記入し、該当図書三部を添えて審査委員会へ提出してください（図書は、申し出により審査後に二部まで返却します。要項・推薦書をご希望の方には送付します。また推薦書は、当事業団のホームページからダウンロードできますのでご利用ください。

【表彰】
高知出版学術賞・三点以内に賞状と賞金十万円、特別賞・二点以内に賞状と賞金五万円を贈ります。

推薦・お問い合わせ先
〒七八〇八五二九 高知市九反田一―
（公財）高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会
TEL: 〇八八八八二一五〇七
FAX: 〇八八八八二一五〇六九
Email: kika@kica.jp
http://www.kica.jp

高知市文化振興事業団

三曲目はルトスワフスキー作曲、ザツハー・ヴァリエーション。「ザツハー」を音階になぞらえたフレーズが曲中に出てくる」という横坂さんの解説を聞いて、演奏を聴きながら「ザツハー」のフレーズを探した方も多かったのではないのでしょうか。

休憩をはさんで後半一曲目は、ダツラーバコ作曲、十一のカプリッチョよりI〜III。バツハと同じ時代に生きたというダツラーバコの作曲した曲を、急遽曲目を変更して演奏してください、「今日の公演の核はバツハです」とおっしゃっていた横坂さんの本公演への熱意や意気込みのようなものを感じました。

その後も黛敏郎作曲の文楽で、三味線などの和楽器の演奏を聴いているのではないかと、これは本当にチェロの音色なのかと思ってしまうような音を響かせ、全六曲の熱い演奏を聴かせてくれた横坂さん。アンコールにも応えてくださり、白鳥を弾き始めたときには自然と拍手が起こっていました。

楽器を始めたきっかけを、「父親の教え子にチェロを弾いているお兄さんがいて、一緒に遊んでもらったこと。そのお兄さんのやっているチェロをやりたいと思った」と教えてくれました。きっと会場にいた小学生や中学生の姿はとて印象に残ったことと思います。

また、公演前日には丸の内高等学校音楽科にてアウトリーチを行い、約五十名の学

生とも交流しました。

学校にある

しばらく誰

も弾いてい

ないという

チェロとの

弾き比べも

行いました

た。実際に

チェロを弾

いてみた学

生さんも数

人いて、初

めての体験に

わくわくしつ

つもおそろ

る楽器に触

れる、微笑

ましい一場

面もあり

ました。弾

いていな

い楽器は

音が閉じ

こも

るそうなの

で、日頃音

楽により

近い環境

にある学

生さんは、学校のチェロと横坂さんのチェロの音の差を私たち以上に感じ取り、感化され、今後の学びにつながる時間が過ぎたのではないのでしょうか。

本公演では、音に聴き入る人、手元を食い入るように見つめる人、観客によって楽しみ方も様々でしたが、会場全体が集中した雰囲気、豊かな音色で練り上げられる演奏に引き込まれている様子はとても印象的でした。初めて小ホールに来る方も多かったようで、今後も新たに観客を増やしていける事業ができればと思います。

〈入場者数 百二十二名〉



第34回写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

過去から現在に至る高知県内の出来事や風景、人々の暮らしを記録し、郷土の様々な表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。優れた作品は、平成30年3月20日(火)から開催される入選作品展にて、たくさんの方にご覧いただけます。

【募集テーマ】

- 記録写真部門 ①平成の部 ②昭和以前の部【高知県に関する記録性を持った写真】
- LOVE 高知部門【あなたの好きな高知の写真(平成29年1月1日以降に撮影されたもの)】

【賞】

各部門ともに特選2点(賞状・賞金3万円)、準特選10点以内(賞状・賞金1万円)

【応募要領】

- ・出品料は無料、応募はどなたでも、一人何点でも応募できます。
- ・サイズは、カラー・モノクロともにワイド四ツ切サイズ以上とし、組写真は3枚までとします。
- ・2018年1月31日(水)締切です。※その他詳細はお問い合わせください。

【応募先】

高知市文化振興事業団 写真コンテスト係(月曜休館。祝日・振替休日は開館)
〒780-8529 高知市九反田2-1 TEL 088-883-5071



第33回「LOVE 高知部門」準特選 天空の要塞(藤田 威佳志)

ブラタモリ・高知



風俗歳時記



九月三十日に放映された「ブラタモリ・高知」(NHK)を見て、司馬遼太郎の小説作法について考えさせられた。司馬文学について取り上げられるとき必ずといっていいほど引用される文章がある。

「ビルから、下をながめている。平素、住みなれた町でもまるでちがった地理風景にみえ、(中略)つまり、一人の人間をみる時、私は階段をのぼって行って屋上へ出、その上からあらためてのぞきこんでその人を見る。同じ水平面上でその人を見るより、別なおもしろさがある。」(私の小説作法)司馬遼太郎・集英社文庫「小説と歴史」

司馬遼太郎の歴史小説の、鳥瞰的手法

を巧みに比喩したものとされている。ところが私は、この評価に不満を感じてきた。私は司馬文学の面白さは、巨視的な歴史解釈よりもむしろ、微視的な人物描写にあると感じていたからだ。その不満が「ブラタモリ・高知」を見て解消した。「高知の地形が龍馬を生んだ」という「お題」である。タモリ一行はまず、高知城の天守閣に登って四方を眺め渡す。四方は山である。海は見えない。高知市はほとんど盆地に近い地形である。

ところが、その「お城下」で龍馬は生まれ育ったのである。どうして龍馬は「海の男」と言われる存在になったのだろうか?という疑問が自然に生まれる。それはまた、龍馬は桂浜までどうやって

行ったのかという「なぜ」でもある。ところが、城を降りたタモリ一行は、市内に残る痕跡から、堀の跡を探り出す。そして龍馬が、この堀と川という水運を利用して足しげく種崎の親戚の家へ通っていたことを明らかにする。高所で発見した「なぜ」を路上で解く。この手法にはっとさせられた。司馬遼太郎の小説手法と同じである。司馬も、高所に立って歴史上の人物を巨視的に把握するが、そのあと想像力を駆使して、人物の行動の細部を描出する。巨視と微視との交錯の中に司馬文学の魅力はある。そう考えれば、ビルの屋上の比喩は、司馬文学の一面を巧みにとらえたものとして、納得できるものになる。

(本の虫)

高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

カメラの変遷(昭和～平成の成人式) 松木 宣博
(昭和57年・平成19年・平成27年 高知市成人式)

時代とともに変化するカメラをテーマにしました。

- ①昭和57年頃は重量感のある皮ケース付きのフィルムカメラ。
- ②この頃にはデジタルカメラが登場。まだまだ簡易なレンズ付きカメラも多く見られた。
- ③現代はスマホの時代。「自撮り棒」なる器具も登場。

『光をくれた人』



心を閉ざし孤独だけを求め、オーストラリアの孤島で灯台守となったトム。しかし、美しく快活なイザベルが彼に再び生きる力を与えてくれた。彼らは結ばれ、孤島で幸福に暮らす。度重なる流産はイザベルの心を傷つける。
ある日、島にボートが流れ着く。乗っていたのは見知らぬ男の死体と泣き叫ぶ女の子の赤ん坊。赤ん坊を娘として育てたいと願うイザベル。それが過ちと知りつつも願いを受け入れるトム。4年後、愛らしく育った娘と幸せの絶頂にいた二人は、偶然にも娘の生みの母親ハナと出会ってしまう。

©2016 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC

日時: 2018年1月25日(木)・26日(金) 11:00~
上映作品: 『光をくれた人』『カフェ・ソサエティ』(2作同時上映)
会場: 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
料金: 一般 前売り 1,300円(当日 1,500円)
割引 1,000円 (学生証・長寿手帳・障害者手帳などをお持ちの方)
※一枚のチケットで両方の作品が鑑賞できます。
お問い合わせ 高知市文化振興事業団 088-883-5071



第7回高知の音楽活性化事業
Dual KOTO×KOTOコンサート
~日本の伝統楽器・箏の響き~

日本の伝統楽器であり、最近ではクラシックなどとの交流も盛んに行われている箏。
Dual KOTO×KOTOの梶ヶ野亜生と山野安珠美が魅せる、伝統楽器の粋を超えた「箏」の音色で心安らぐひとときをお楽しみください。

【日時】 2018年2月24日(土) 13:30開演
【会場】 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
【入場料】 全席自由
一般 前売り 1000円(当日 1200円)
高校生 前売り 500円(当日 600円)
※未就学児入場無料

〈特別企画〉 小学生200名 無料ご招待
Dual KOTO×KOTOコンサートに小学生200名をご招待します。
ご希望の方は、往復はがきにて必要事項(郵便番号・住所・氏名・小学校名・学年・電話番号)をご記入の上、1人につき1通を2月9日(金)必着で〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化振興事業団「KOTO×KOTOコンサート」係までお申込みください。申し込み多数の場合は抽選の上、抽選結果を2月16日(金)までに返信いたします。

お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

顔の整い

を過ぎると顔に責任をもて」とよくいわれるのはそういうことだろうし、相撲でいう「心技体」の最初に「心」をもってきているのも、技術や体力よりも精神とか心の状態を重んじているのだろう。
T氏は「日々の営業で、月何百人といういろいろな人たちに会って話をした体験から、そんな風に考えるようになって

先日知人のT氏が「会社の経営者やスポーツマン、どんな職種でも、才能を発揮できる人は顔が整っている。顔にはその人がこれまでどれだけ勉強し脳をつかっているかの積み重ねが出ていて、そうしている人ほど顔が整っている」と話していた。
異論のある人もいるだろうが、そんな一面もあるのだろうと思った。「四十歳

た」のだというが、この「顔が整っている」という表現に、私は惹かれた。
人間の顔の輪郭や目の大きさ、鼻の高さや額の広さなど、その多くはご先祖さまから受け継いだ血のようなものがある。私など、どうあがいてもフラット・ビットのようににはなれない。顔の話である。
鼻の高さや目の大きさなどは違つた、顔の整い具合は、生まれてから十年、二十年、三十年と経てば、その間にどれだけ物事を探求し、脳をつかってきたか、どのような生き方をしてきたか、そんな人間性のようなもので、ご先祖さまの血を覆い隠すように、自ずから顔の整いに出てくるのだろう。
男前だとか美人だとかいうのではなく、いかに「顔が整って」いるか。どんな職種であっても、この整い方が、本来の人間のもてる魅力なのだろうと思ふ。
(霖)

今号の表紙

「野市凧上げ」 田所 優弥

お正月をテーマに凧上げの写真を選びました。この写真は高知県香南市で行われている新春凧上げ大会という景品付きカード「トパン」を空中からまき、子ども、大人も関係なく取りあう楽しいイベントでした。
地域の人にしか知れていないのでこれをきっかけに高知ならではのイベントとしてさまざまな人に広まってほしいです。
(たどころ まや / 国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



私は私の体について、ほとんどのことが分からない。

- 会場 高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
- 料金 一般2,000円
高校生以下1,000円
※当日各500円増 ※全席自由
※未就学児入場不可
- チケット取扱い
高知市文化プラザミュージアムショップ、
高新プレイガイド
ローソンチケット(Lコード:62877)など
- 主催・問い合わせ
高知市文化振興事業団
088-883-5071

About the human body.

ON 2018 1.21.SUN

【開場】14:30 【開演】15:00

平成29年度公共ホール現代ダンス活性化支援事業

高知市文化プラザ
かるぽーと